（公財）東広島市教育文化振興事業団
【令和7年度実践レポート】


人を動かし、地域を変える。
すべての専門性が
ひとつの力になる
絵載はいいまで進化できる。
—新たな次元へ—

（公財）東広島市教育文化振興事業団
【令和7年度実践レポート】



オオサンショウウオ保全Jr.クラブ

学びの専門職が導く実践型学習により、子どもたちの「好き」が行動へと進化。研究・保全・発信を一体で展開し、地域の未来を担う力を育む、東広島市教育文化振興事業団だからこそ実現できる取組。

目的は百年先も共存できる社会の実現―

学校も学年も違う小中高校生 33 名が参加する通称「保全クラブ」。オオサンショウウオが大好きな子どもたちが、百年先も共存できる社会の実現に向けて、自分たちの手で保全活動に取り組む。

彼らが守るのは、国の特別天然記念物オオサンショウウオ。120cm を超える大きな体のこの生物は、東広島市内の川の中にも生息している。しかし、最近は数を減らし、絶滅危惧種にも指定されている。種の絶滅をどう回避するか―　解決困難な社会課題に10代の若者が本気で向き合っている。

全国でも類を見ない取組―

事業は東広島市教育文化振興事業団･広島大学･NPO の三者連携で実施。調査に必要な技能・経験を大学が、商品開発販売等を NPO が担う。講師が事業団職員・大学客員研究員・NPO 理事長を兼ねることで、リアルタイムで多岐にわたる高度な判断と連携をロスなく運営する体制。研究・執筆・商品開発等の多様な実績に基づくノウハウで、参加者の多様なアイディアを次々に成果に導く。

調査も自分たちで―

大学の調査として行われるフィールドワークでは、自分達で周年オオサンショウウオの生態調査を行う。秋には繁殖が行われているか、冬には卵がふ化して新しい世代が生まれているか、自分たちで調査計画も考え、川を見守っていく。

夜間調査やオオサンショウウオが登れるスロープづくり等、活動内容は多岐にわたり、研究者の行う調査のレベルに日々近づいている。







知ってもらう活動にも尽力ー

共存できる社会の実現には、たくさんの人に知ってもらうことが欠かせない。

クラブでは、メンバーが企画・運営を務める観察会も開催した。10代の若いメンバーが自分達と同世代やさらに年下の参加者に魅力を伝えていく。そこで魅力を知り、新たなメンバーが増えていく好循環が形成されている。少子高齢化が進む地域に若い人が継続的に訪れ、切れ目のないつながりを作っていくことも、クラブの目指す形の一つ。



実践力のある担い手の育成ー

特別天然記念物を扱う以上知識の習得も必要。月二回、放課後に西条と豊栄の拠点に集まり、法令の学習や危険予測、調査計画の立案等を行う。

それに加え、メンバーは一人一つ自分のプロジェクトを立ち上げて進めている。それぞれの熱い思いを原動力に、事業の正式スタートから1年の間に多様な成果が上がった。一例を挙げれば、クッキー、カードゲーム、キーホルダー、LINEスタンプ、Tシャツの商品開発・販売開始、イラストコンクールの開催と入賞作品のカレンダー化、広島大学総合博物館の展示物作成、高校大学生のプレゼン大会では最年少の高校1年生ながら350人中2位に輝いた。初開催となった豊栄オオサンショウウオ検定には、県外からも多くの参加者が豊栄を訪れたほか、年度末の展示・発表会には他県の生息地から視察団が訪れるまでになった。

参加者は年度をまたいで参加が可能。継続して事業に関わり続けられる体制が、長期計画でのプロジェクトの実現を可能とし、大きな成果の達成を可能とするほか、参加者のペースに合わせた目標達成を可能としている。

同じ「好き」を持って集まれる居場所の中で、熱意を成果に変えていく。自分の力で達成した成果は、揺らぐことの事実として財産となり、さらに先の段階へ足を進ませる。成果が「自信」と「自覚」を生み、高い問題解決能力を持つ人材と、地域の宝を守る担い手を育てていく。

まち全体が、学びのキャンパスになる。

― 専門職が紡ぎ出した“学びの軌跡”―

文化・学習センターを拠点に、市全域を舞台として展開された学びの数々。その一つひとつは、学びの専門職が描き出し、市民の“動き出す瞬間”を生み出した実践の軌跡です。その結晶をチラシとして散りばめました。ページをめくるたびに、次の一歩を踏み出したくなる“学びの現場”が立ち上がります。













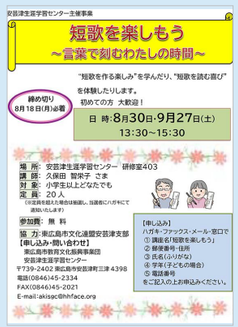








講座実施回数……
学びが止まらない、年間400回の実践展開
参加者数……
参加が広がり続ける、前年度比約150%へ拡大
施設利用者数……
まちに根づく学びの場へ、利用者数約109%に増加
※黒瀬生涯学習センターは改修工事のため除外











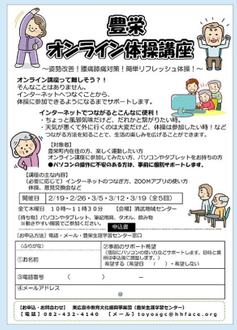




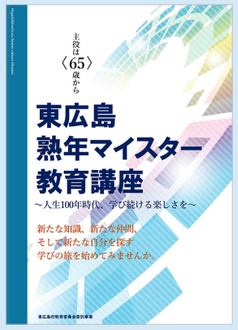




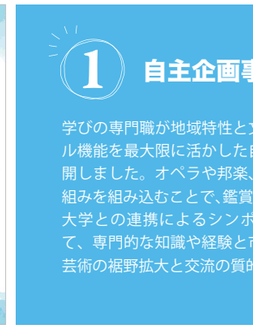
































まち全体が、学びのキャンパスになる。

― 専門職が紡ぎ出した“学びの軌跡”―

2 生涯学習機会の充実

学びの専門職が多様な市民ニーズを的確に捉え、市民文化センターおよび各生涯学習センターにおいて体系的な講座を構築しました。多世代に応じた学習機会を継続的に設計・提供することで、単発の参加にとどまらない“学び続ける環境”を形成し、市民の主体的な学習活動への参画を促進しました。











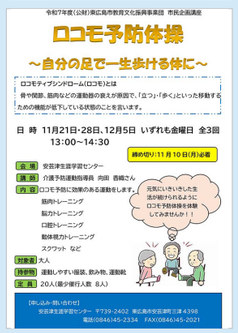


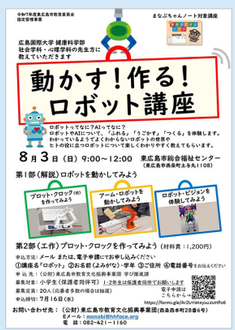
















3 地域課題解決型の学びの推進

学びの専門職が大学・市民・地域資源を結び付け、課題解決に直結する実践型プログラムを設計・展開しました。熟年マイスター教育講座や市民企画講座を通じて、学びを“地域で活かす力”へと転換。受講者の行動変容を促し、主体的な地域参画と学びの社会的実装を実現しました。













































総括

学びの専門職によるコーディネート力により、自主企画事業、生涯学習支援、地域課題解決型プログラムを有機的に連動。学びを“個人の経験”から“地域を動かす力”へと変え、多様な主体の参画と実践を引き出すことで、市民活動の深化と地域社会の活力創出を実現しました。

学びが人を動かし、まちを変える。

― 学びの専門集団が創る“市民の行動を生む力”―

組織力と学びの専門職員が融合し、学びを通じて人の「やってみたい」という思いを引き出し、行動へとつなげる。多様な主体をつなぎ、共感と実践を連鎖させながら、地域に新たな価値を生み出す―ここにしかない学びの力が、まちを動かすエンジンとなっています。

市民文化センター

専門職が設計する主体性を引き出す学びのプロデュース

じぶん創造☆プロジェクト

小学生を対象に、継続的な学びの機会として講座を実施し、大学生が企画から運営まで主体的に担いました。体験型プログラムを通じて子どもたちの「できた」という達成感を積み重ねる機会を創出し、世代間の関わりの中で自己肯定感を高めるとともに、子どもたちの主体的な学びの姿勢の形成に寄与しました。







外国人研究者の知と実体験が牽引する多文化共生の最前線

東広島こどもミニ万博

多様な文化をテーマとした体験型プログラムにより、世代や国籍を越えた交流機会を創出しました。実体験を通じて相互理解と尊重の意識を育むとともに、子どもたちの多文化共生意識の醸成を図り、地域センターとの協働により担い手育成にも寄与しました。

学び × 多文化専門職のタッグにより平和教育を世界へ発信

英語でつなぐ記憶と平和

被爆体験伝承者による英語での講話を通じて、国籍や年齢を問わず平和について考える学びの場を提供しました。歴史的事実を多言語で共有することにより、東広島市民として過去の記憶を未来へ継承する意識の醸成と、多文化理解の深化に寄与しました。








相談支援の専門知識を起点に創出する、学びをつなぐ設計力

マッチング交流会

学びの活動者（講師）が実演や動画、展示等により活動を発信し、社会教育関連施設職員との交流・相談の場を創出しました。双方向の対話を通じて相互理解を深め、具体的な事業企画へとつながる実践的なマッチングを実現し、地域における学びのネットワークの拡充と連携強化に寄与しました。

社会教育士のノウハウを豊かな学びへ創出

東広島熟年マイスター教育講座

65歳以上を対象に、多彩なテーマと実践的な学びを通じて新たな知識・技能の習得を図るとともに、受講者同士の交流を促進しました。学びの成果を地域活動へと還元する機会を創出し、生涯にわたる学びの充実と地域社会への参画意識の向上に寄与しました。







教員経験から培った実践力で変革する、家庭教育支援の新展開

おやこで金トレ～親子の金融リテラシー教育講座～

増加する子どもの金銭トラブルを背景に、親子で金融リテラシーを学ぶ機会を提供しました。家庭内でお金の管理や使い方について話し合う機会の創出を促し、子どもの主体的な判断力の育成と将来の社会的自立の基盤形成を図りました。




現役子育て・保育経験の目線で親子関係の醸成

親子でトトノウ３日間

小学生以上の親子を対象に、黒瀬地域の自然資源を活用した体験型講座を実施しました。五感を活かした多様な活動を通じて、子どもの主体性を引き出すとともに、親子間および参加者同士の関係性を深め、自然と共生する学びの価値を実感する機会を提供しました。

黒瀬生涯学習センター

市民ニーズを的確に捉え形にする、専門職の企画設計力

てぃ先生と学ぶ「魔法の子育て術」

育児中の保護者や保育関係者を対象にオンライン講座を実施しました。専門家同士の対談形式により、参加者の具体的な悩みや課題に寄り添いながら理解を深め、子育てへの前向きな意識の醸成を図りました。心理的支援の視点を取り入れた実践的な学びの機会を提供しました。







地域資源を“学びの価値”へ変える、専門職のプロデュース力

夏休み子ども陶芸教室

地域資源である創作村を活用し、親子で参加できる陶芸講座を実施しました。土の特性を活かした制作体験を通じて素材の魅力とものづくりの楽しさを実感するとともに、手作りによる達成感を育み、創造性の伸長と主体的な学びの深化に寄与しました。

豊栄生涯学習センター

デジタル活用の専門性で課題を解決する、地域学びの革新設計

豊栄オンライン体操講座

移動が困難な方や在宅での学びを希望する方を対象に、オンラインを活用した講座を実施しました。ICT 活用に関する基礎的知識の習得を支援するとともに、学びを通じた地域とのつながりの重要性への気づきを促し、多様な学習機会の確保に寄与しました。








学び × スポーツの専門性で切り拓く、多文化共生の新たな接点

ともだちプロジェクト

ニュースポーツ（ボッチャ、モルック）を活用し、言語や文化の違いを越えた交流の場を創出しました。やさしい日本語による運営と体験型活動を通じて、外国人市民と地域住民の相互理解を深めるとともに、誰もが自然に関わり合える共生の実践機会を提供し、多文化共生社会の形成に寄与しました。

安芸津生涯学習センター

舞台表現の専門性が生み出す、参加型学びの一体感プロデュース

のどを自慢しよう大会 in 安芸津

地域イベントと連携し、生バンドによる参加型ののど自慢大会を実施しました。幅広い世代が出演・観覧の双方で関わる場を創出し、観客投票を取り入れることで会場全体の一体感を醸成しました。舞台体験を通じた交流促進と地域文化の活性化を図り、地域に新たな賑わいとつながりを創出しました。





ことばが人をひらき、共生がまちを動かす。専門職が創り出す多文化共生社会のうねり

― 共生を“現実に変える”コーディネートカ ―

ことばを学びに、学びを行動に変える地域日本語教育コーディネーター。地域と人をつなぎ、関係を動かす多文化共生コーディネーター。それぞれの専門性が、外国人市民の一歩を引き出し、“参加する人”を“地域をつくる人”へと変えていく。ここにしかない実践が、共生のかたちを動かしている。















1 ことばの力を解き放つ。日本語教育の革新は、ここから動き出す。

ことばの力を引き出す、専門職が設計する多様な日本語教育プログラム

日本語教育コーディネーターの専門性に基づく設計により、にほんごⅣを開講。にほんご教室オープンデーの実施を通じて学習者が地域で学んでいる様子を知ってもらい、学生の実践的学びの場としても展開。また、サポーター制の導入により、外国人市民の学びを地域と接続し、多文化共生を担う人材育成と次の展開につなげました。

219回開催／延べ3,228人参加（学習者）、延べ1,320人（ボランティア）
※one-to-oneは除く

2 学びは、どこへでも届く。日本語教育が可能性をひらく。

どこでも学びを実装する、先導型オンライン日本語教育

日本語教育コーディネータ　ーの発案により、対面に限定されない新たな学習モデルとしてオンラインコースを構築しました。市と連携した提案により、その有効性が評価され、令和7年度より広島県が実施展開。外国人市民の多様な学習ニーズに応える持続可能な日本語教育の基盤形成に寄与しました。

8回開催／延べ 72 人参加

3 ことばが“居場所”をつくる。子どもの未来をひらく日本語教育の実践。

学びと安心を支える、専門職が設計する子ども日本語教育と学習支援との融合プログラム

日本語教育コーディネーターの実践と現場調整力により、外国人児童生徒の学びと居場所を一体的に支える支援を展開しました。放課後や休日における教科学習支援を通じて、「できた」という実感を積み重ねる機会を創出。教師·ボランティアと連携しながら、子どもと家庭が安心して学校で学べる環境づくりを推進しました。

71回実施／延べ 1,442 人（学習者）・延べ 379 人（ボランティア）

4 多文化共生は、つくるものから“動き出すもの”へ。

共生を“動かす”地域実装プロジェクト

多文化共生コーディネーターが地域に深く関与し、住民自治協議会等と関係を構築。多言語化や人材マッチング、参加導線の設計により、外国人市民が“参加する側”から“担い手”へと転換する仕組みを創出しました。地域主体の実践へと発展させ、多文化共生意識の醸成と持続的な地域参画モデルの構築につなげました。

13 機関連携（自治協、社会福祉協議会など）

人を動かし、地域を変える。スポーツ専門職が創り出す共創のダイナミズム

― つなぎ、育て、広げるスポーツの設計力 ―

現場で培ったスポーツの力で、人と人、人と地域をつなぐ。動き出した一歩を、続ける力へ、そして広がる力へと変えていく。参加が日常へと根づき、その積み重ねが地域を変えていく――その流れを生み出しているのが、事業団のスポーツ専門職員です。





1 地域が“共創”へ進化する

黒瀬みらい会議プロジェクト

スポーツ専門職員のコーディネートにより、地域・大学・行政をつなぐ持続的な連携基盤を構築。ウォーキング事業を核に多主体が関わる仕組みを設計し、200 人規模のイベントへと発展させました。さらに、地域イベント同士を結びつけることで新たな価値を創出し、地域主体で展開される“共創型まちづくりモデル”へと昇華しました。

2 市民が“健康を支える側”へ変わる

生きがい健康体育大学プログラム

スポーツ専門職員が設計する体系的カリキュラムにより、健康づくりを担う人材を育成。大学や専門講師との連携により、実践的知識と技能を習得させることで、受講者を地域の健康リーダーへと転換しました。防災分野も取り入れた複合的な学びにより、地域に還元される“持続型人材育成モデル”を確立しました。

3 出会いが“挑戦”を生む

アクアパークチャレンジスポーツ

競技団体やプロチームとの連携を通じ、多様なスポーツ体験を一体的に設計。分散会場という制約を逆手に取り、参加者の回遊性と体験価値を高める仕組みを構築しました。初心者から経験者までが“自分に合うスポーツ”と出合う場を創出し、新たなスポーツ参加の入口として機能するモデルを実現しました。

4 新たなスポーツ文化が芽吹く

ピックルボール普及プロジェクト

スポーツ専門職員の先進的視点により、新競技ピックルボールを導入。初心者でも参加しやすい設計により、短期間での上達と継続的な参加を実現しました。競技団体との連携により普及基盤を構築し、市民の新たなスポーツ文化として定着させる実装モデルを創出しました。

5 地域人材が“進化し続ける”

コミュニティー健康運動パートナー育成プログラム

地域で活動する健康運動パートナーに対し、スポーツ専門職員が継続的な学びと実践機会を提供。新たなスポーツや知識の導入により、地域で活躍する人材の質を高め続ける仕組みを構築しました。育成にとどまらず“成長し続ける人材”を支えることで、地域全体の健康力向上に寄与しました。

作品が動き出し、鑑賞が“体験”へ進化する。学芸員が創り出す新たな美術館の可能性

— 表現と人を響き合わせる、美術館の創造エンジン —

文化資源を読み解き、価値として再構築する高度な専門性と柔軟な発想力により、展示を“見るもの”から“関わるもの”へと転換。収蔵・研究・展示の知見を横断的に統合し、来館者の体験価値を設計することで、鑑賞行為そのものを進化させる、事業団ならではの価値創出キュレーション機能。















1

鑑賞が“冒険”に変わる

アートアドベンチャーの創出

コレクション展を起点に、作品鑑賞を“探求体験”へと転換する設計により、来館者が主体的に作品と向き合う新たな鑑賞モデルを創出しました。クイズ形式の鑑賞シートを活用することで、知識の一方的な提供にとどまらず、思考と発見を伴う参加型の鑑賞体験を実現。作品理解の深化と鑑賞の楽しさを両立させる新たなアプローチを提示しました。

2

観光が“文化価値”へと広がる

のん太トレーディングカード連動プロジェクト

東広島市観光協会の「地域を巡る楽しさを創出する取組」を起点に、学芸員の専門性を掛け合わせることで、美術館を観光資源として位置づける新たな展開を実現しました。のん太トレーディングカードやクイズラリーと連動させ、市内回遊と文化体験を融合した参加型モデルを構築。観光と文化を接続し、来館動機の創出と地域の魅力発信を同時に高めました。

3

サテライト展示が“まちを動かす体験”になる

特別展『透明標本』の創出

学芸員の専門性と空間演出力により、透明標本を“没入型の体験”へと進化させました。生物学的価値と芸術性を融合させた展示に加え、市内 7 箇所でのサテライト展示やクイズラリーを展開。鑑賞体験を館外へ広げ、来館動機と市民参加を創出し、延べ 28,691 人の入場者につなげました。

4

体験が“理解”を深める

教育普及ワークショップの展開

学芸員の専門性を基盤に、作品理解を体験的に深める教育普及プログラムを展開しました。ワークショップや対話型鑑賞を通じて、年齢・国籍・障がいの有無など、多様な背景を問わず、誰もが作品と関われる環境を創出。鑑賞を受動的な行為から能動的な学びへと転換し、美術館を起点とした文化的理解の深化と共生の場づくりに寄与しました。

表現がひらき、現場が響き合う。価値を紡ぎ出す文化芸術専門職の創造力

— 文化芸術活動コンシェルジュ —

音楽文化の専門性と多様な現場での実践経験を武器に、現場ごとに異なる課題とニーズを読み解き、表現をゼロから設計。演奏者・現場・市民をつなぎながら、単なる提供にとどまらない価値を生み出す——その実践力を体現する、事業団ならではの価値創出エンジン。















1

異分野が“響き合う”

響筆～音楽と書のコラボレーション 企画伴走支援

異分野の表現を融合させる専門的視点により、音楽と書という領域横断型の新たな表現空間を創出しました。書道家のマッチングから学生の巻き込み、体験要素の設計までを統合的に構築し、来場者が“参加する表現”へと昇華。分野や世代を越えた共創の場を実現し、文化芸術の新たな価値を可視化しました。

＼ 市民の声 ／

「音楽と書が一体となる空間に引き込まれ、新しい芸術体験だった」

2

地域を“舞台”に変える

地域センター・自治協との連携によるコンサート実施支援

地域のニーズを読み解き、表現の価値へと転換する専門的コーディネートにより、単発の支援にとどまらない事業化を実現しました。アーティストの適切なマッチングとアウトリーチ資源の活用、運営設計までを一体的に組み立てることで、地域主体による文化事業の質を向上。文化芸術が地域に根付く実践モデルを創出しました。

＼ 市民の声 ／

「プロの演奏を身近に感じられ、地域のイベントの魅力が増した」

3

参加が“つながり”を生む

ベヒシュタイン × あなたの音楽物語 企画伴走支援

参加者の行動特性を踏まえた設計力により、「予約不要・出入り自由」という新たな参加型モデルを創出しました。場の設計を通じて偶発的な交流や共演を生み出し、音楽体験を“鑑賞”から“関係性の創出”へと拡張。世代を越えたつながりが自然発生する場を実現し、新たな文化芸術事業の可能性を提示しました。

＼ 市民の声 ／

「知らない人と自然に音楽でつながれたことが印象的だった」

4

“伝わる”を再設計する

外国人市民からの相談対応及び多文化専門職員との連携

文化芸術と多文化双方の専門性を横断的に捉える視点により、外国人市民からの相談を単なる情報提供にとどめず、表現と伝達手法の再設計へと展開しました。アーツコンシェルジュが多文化共生コーディネーターと即時連携することで、「やさしい日本語」によるチラシ作成を実現。文化芸術へのアクセスを拡張する新たな対応モデルを構築し、多様な市民に開かれた環境整備へとつなげました。

＼ 市民の声 ／

「自分にも分かる形で案内があり、安心して相談することができた」

組織が変わる。
意思が動く。
価値が生まれる。

― 学びを核に進化する、唯一無二の組織力 ―

当事業団は、制度の見直しにとどまらず、意思決定・人材・財政を一体で再構築。
学びを核に多様な専門職が機動的に連動することで、
組織そのものを“価値を生み出し続ける仕組み”へと進化させました。
ここにしかない組織力が、地域に新たな変化を生み出しています。

【実績】

1 意思決定が“加速”する
本部制による組織再構築

戦略性と機動力を両立する本部制を導入し、運営基盤と学び推進機能を明確化。分野横断の専門職が有機的に連動する体制を構築し、市民ニーズへ即応できる組織へと進化させました。

2 ルールが“力”になる
規程整備によるガバナンス強化

規程を体系的に再編し、意思決定プロセスと権限構造を可視化。透明性と公正性を高めるとともに、迅速でブレない組織運営を実現しました。

3 外の視点が“変革”を生む
外部理事の導入

外部有識者の参画により、経営に多様な視点と専門性を注入。客観性と説明責任を高め、意思決定の質を飛躍的に向上させました。

4 知見が“実装”へと転換する
理事協議の事業反映モデルの構築

各分野の有識者である理事との協議で得た知見を、専門職が事業へと具体化する仕組みを構築しました。現場と経営の対話を常態化することで、“実行力ある意思決定”を実現。理論と実践の往還により、事業の質と社会的価値を高める展開モデルを確立しました。

5 人材が“価値”を創る
多様性 × 専門性の戦略的配置

国籍や専門性を超えた人材配置と短時間勤務を含めたフレキシブルな勤務により、職員個々の能力を最大限に引き出し、価値を最大化。多様な視点が交わることで、新たな発想と価値創出が生まれる組織へと転換しました。

6 経営が“自走”する
持続可能な財政基盤の確立

利用料金制度の導入により、サービス価値に応じた適正な負担を実現。自立性と持続性を兼ね備えた経営基盤を構築し、「公共の充実」を目指す土台づくりを進めています。

【今後の展開】

学びが“ウェルビーイングを生み出す” 地域好循環モデルの進化

学びの専門職に加え、スポーツ・文化・多文化共生など、あらゆる専門職が結集し、組織全体が一体となって機能。学びを起点に、人材・活動・地域をつなぎ、市民一人ひとりのウェルビーイングへとつなげます。

個人の学びを“行動”へ、“行動”を“地域の力”へと転換する仕組みをさらに高度化し、学びが循環し続ける地域好循環モデルを確立します。

共生が“社会の基盤となる” 日本語教育起点の多文化共生モデルの拡張

増加する外国人市民に対応し、日本語教育を中核に据えた事業を戦略的に拡充します。日本語教室の体系化と学習機会の拡張により、言語習得を“地域でともに生きる力”へと転換。あわせて、地域住民の多文化理解を促進し、日本語教育を媒介として相互理解と関係構築を進めます。

その結果、多様な背景を持つ人々が自然に関わり合い、互いに支え合いながらともに地域をつくる、多文化共生社会を基盤として定着させます。

人の変化を、地域の力へ。
それを実現できるのが、
東広島市教育文化振興事業団です。